

新たな時代を豊かに生きる生徒の育成 —主体的に学習に取り組む態度の育成とその評価—

天野慎也 [鹿児島大学教育学部附属中学校]

Developing Students Who Can Live Well in a New Era:

Promotion and Evaluation of Student Engagement in Learning

AMANO Shinya

キーワード：資質・能力の三つの柱、Society5.0 で求められる資質・能力、主体的に学習に取り組む態度、学習を調整する視点

1. 副主題設定の理由

1.1. 社会の情勢より

「Society5.0に向けた人材育成」（文部科学省，2018）で提唱されている「学校 ver. 3.0」とは、「人間としての強みを発揮できる学校集団の中で，生徒が自分の学力や興味・関心に応じて個別最適化された学びを展開する学校」のことである。学校 ver. 3.0 では，EdTech と呼ばれるデジタル技術を用いた教育技法を活用することにより，生徒は自分の習熟度に応じて既習の学習内容を学び直したり，より発展的な学習に取り組んだりすることも可能になる。また，教師は個々の生徒の学習進捗度をリアルタイムに把握し，つまづいている生徒に積極的に指導をすることなども可能になる。これからの学校では，これまで以上に生徒一人一人の学習の状況に合わせた学びを展開していくことが可能になる。しかし，デジタル技術が進化したり，教師がきめ細やかに指導したりするだけで学びが効果的なものになるわけでない。生徒が自分の学習の状況を把握し，必要に応じて学習を調整していこうとする姿勢が不可欠であると考えられる。

新型コロナウイルスの感染拡大により全国一斉臨時休業となったとき，全国の多くの学校では，「休校期間用のテキストやプリントを配布する。」，「学校からの宿題をホームページ等を通じて掲載する。」などの対応が行われた。そのような中，一部の学校ではインターネットを利用して，オンデマンド型や同時双方向型のオンライン授業に取り組み，生徒の学習保障のための工夫が行われた。しかし，インターネットを利用しないオフライン環境の学校に比べて，生徒自身が自分の学習状況を把握し，主体的に学習を調整しやすいと思われるオンライン授業を実践している学校の生徒からできても，「学校に行って，先生に教えてもらわないと，どのように学習をしていいのか分からない。」という声が聞こえてくる状況であったという報告もある。

つまり，生徒自らが目的や目標をもって自分の学習を調整しながら問題解決に取り組んだり，問題解決に向けて持続的に努力をしたりするような態度は，十分に育成されてこなかったと考えられ

る。したがって、自らの学習の状況を把握し、必要に応じて学習を調整していこうとする姿勢が生徒に求められると同時に、そのような姿を促すような指導が教師に求められているのである。

1.2. 研究の経過より

予測困難な時代において、生徒たちがAIやデータの力を活用する中で人間としての強みを発揮し、他者と関わりながら豊かさを追求できる社会を創造していく人材になれるように、本校では平成30年度から研究主題を「新たな時代を豊かに生きる生徒の育成」と設定して研究を進めている。文部科学省(2018)の中で「Society5.0で共通して求められる力」として、「文章や情報を正確に読み解き、対話する力」、「科学的に思考・吟味し活用する力」、「価値を見つけ生み出す感性と力、好奇心・探求力」が挙げられている。これらの力は、文部科学省(2018)で、「これまで誰も見たことがない特殊な能力ではなく…(中略)…どのような時代の変化を迎えるとしても、知識・技能、思考力・判断力・表現力をベースとして、言葉や文化、時間や場所を超えながらも自己の主体性を軸にした学びに向かう一人一人の能力や人間性が問われることになる。」と記されていることから、本校では「Society5.0で求められる資質・能力」として、資質・能力の三つの柱の中に含まれるものと捉えており、1年次から継続している。そして、これらの資質・能力を、表1で示す「Society5.0で求められる資質・能力を育成する三つの活動」(以下、「三つの活動」とする。)を通して育成してきた。

1年次では、Society5.0で求められる資質・能力が各教科で育成されるように、Society5.0で求められる資質・能力を各教科で育成すべき資質・能力と関連付けて、三つの活動が充実する手立てを講じたり、授業デザインやカリキュラム・デザインを取り入れた実践を行ったりした。2年次では、学校教育目標を始め、学年や各教科等の目標を資質・能力の三つの柱で整理し、各教科で三つの活動の実践を積み重ねた。また、各教科等のグランドデザインを作成してカリキュラム・マネジメントの取組を行い、授業改善を進めた。2年次の取組で、学校教育目標を始めとするそれぞれの目標を資質・能力の三つの柱で整理したことにより、一単位時間に育成すべき資質・能力と、教科の目標や学校教育目標に示されている資質・能力とのつながりを意識しやすくなり、授業のねらいを明確にすることができた。しかし、資質・能力をよりよく育成するために各教科で三つの活動を

表1 Society5.0で求められる資質・能力を育成する三つの活動

読み解き・対話する活動	情報(文章や式、芸術なども含む)を、その文脈や関係性などを含めて正しく理解したり、他者と対話したりして、自己の考えを広げ深めるための活動
思考・吟味する活動	問題(課題)を解決して得られたモノ等、またはその過程で得られた考え方等を振り返り、よりよくするための活動
価値を見つけ・生み出す活動	問題(課題)を解決して得られた解(唯一解、最適解)や創り上げた作品等をもとに、目的に応じて多面的・多角的に評価したり、それらを生かして新たな価値を創造したりするための活動

充実させる手立てを講じたが、各教科で三つの活動を充実させる手立ての有効性を振り返ったときに、「知識及び技能」や「思考力、判断力、表現力等」の育成に教師の意識が偏ってしまい、「学びに向かう力、人間性等」を育成する教師の視点が十分でなかったことが課題として挙げられた。

「学びに向かう力、人間性等」は、「知識及び技能」や「思考力、判断力、表現力等」とは別に育成するものではなく、また、いずれかの資質・能力の柱が育成されてからでなければ育むことができないという順序性があるものでもない。二つの資質・能力の柱と一体となって高まるものであるため、「学びに向かう力、人間性等」を育む手立てが充実することによって、資質・能力の三つの柱をバランスよく育成できると考えられる。文部科学省の通知（以下、「改善等通知」とする。）では、『学びに向かう力、人間性等』については、『主体的に学習に取り組む態度』として観点別学習状況の評価を通じて見取ることができる部分と、観点別学習状況の評価にはなじまず、個人内評価等を通じて見取る部分があることに留意する必要がある。」としている。したがって、観点別学習状況の評価として生徒の学習状況を分析的に把握することが可能な「主体的に学習に取り組む態度」を、各教科等の目標や内容に照らして育成していくことが「学びに向かう力、人間性等」を育成していくことにつながると考え、本研究では、「主体的に学習に取り組む態度」の育成を目指した授業づくりを行い、資質・能力の三つの柱をバランスよく育成する手立てを充実させることにした。

1.3. 生徒の実態より

改善等通知では、『主体的に学習に取り組む態度』については、各教科等の観点の趣旨に照らし、『知識及び技能』を獲得したり、『思考力、判断力、表現力等』を身に付けたりすることに向けた粘り強い取組の中で、自らの学習を調整しようとしているかどうかを含めて評価すること」としている。「主体的に学習に取り組む態度」を評価した結果を活用して指導の改善等を図ることが重要であるので、「主体的に学習に取り組む態度」をより具体的に捉えることがその育成につながると考えた。そこで、櫻井（2020）を基に本校では「主体的に学習に取り組む態度」を「興味や楽しさを感じながら目的や目標をもって自分の学習活動を調整して課題の解決に取り組み、その解決に向けて持続的に努力をしようとする態度」と捉えた。この捉えを基に本校生徒の実態を把握するため、櫻井（2020）に記されている調査項目を基にアンケートを作成し調査を行った。調査時期は令和2年7月、調査対象は本校生徒全学年計576名である。次頁の図1は調査結果をまとめたものである。

図1の調査結果より本校では、粘り強さ①、②が高くなっていて、「知識及び技能」を獲得したり、「思考力、判断力、表現力等」を身に付けたりすることに向けて粘り強い取組をしている生徒が多いことが分かった。しかし、学習の調整①、④、⑤が粘り強さ①、②よりも低くなっていた。つまり、本校生徒は、自らの学習を調整しようとするように手立てを講じる必要がある。

したがって本研究では、「主体的に学習に取り組む態度」を高める中で、生徒が自らの学習を調整しようとするように指導の工夫を行っていく必要があると言える。そして、「主体的に学習に取り組む態度」の評価を行い、その評価の結果を生徒の学習改善や教師の指導改善に生かすことにより資質・能力の三つの柱がバランスよく育成されることが考えた。これらのことから、本研究の副主題を「主体的に学習に取り組む態度の育成とその評価」と設定した。

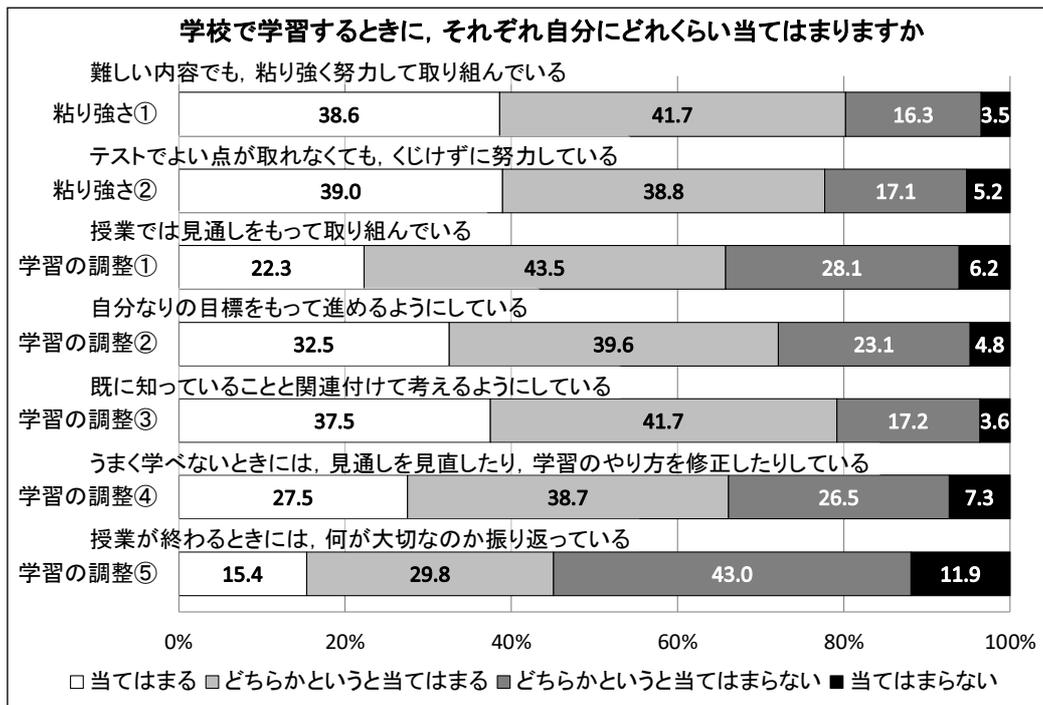


図1 アンケート調査の結果

2. 学習を調整する視点を取り入れた Society5.0 で求められる資質・能力を育成する三つの活動の指導の工夫

2.1. 「主体的に学習に取り組む態度」と学習を調整する視点との関係

「主体的に学習に取り組む態度」の評価について、中央教育審議会の報告（以下、「中教審報告」とする。）には、「評価の対象とする学習の調整に関する態度は必ずしも、その学習の調整が適切に行われているかを判断するものではなく、それが各教科等における『知識及び技能』の習得や、『思考力、判断力、表現力等』の育成に結び付いていない場合には、それらの資質・能力の育成に向けて児童生徒が適切に学習を調整することができるよう、その実態に応じて教師が学習の進め方を適切に指導するなどの対応が求められる。その際、前述したような学習に関する自己調整にかかわるスキルなど、心理学や教育学等における学問的知見を活用することも有効である。」と記されている。つまり、「主体的に学習に取り組む態度」を指導したり評価したりする際は、心理学や教育学等における学問的知見を活用することが有効であると言える。そして、町（2020）が、「新学習指導要領の評価の観点の一つである『主体的に学習に取り組む態度』の背景には、心理学の『自己調整学習理論』がある。」と述べていることから、本校では、自己調整学習理論が、生徒が自らの学習を調整しようとしながら学習活動に取り組むようにするという指導と評価の視点になるのではないかと考え、自己調整学習理論を生かすことにした。

2.1.1. 自己調整学習とは

「自己調整」について伊藤（2012）は、「学習者が、メタ認知、動機づけ、行動において、自分自身の学習過程に能動的に関与していること」と捉えている。「メタ認知」は、一般的に自らの認知についての認知のことであり、何かを覚えたり考えたりすることを自覚しコントロールすることや、

そうしたことに関する知識のことを指している。そして学習者が、学習過程のさまざまな場面において計画を立てたり、進み具合などを俯瞰的に自己評価したりすることを指している。「動機づけ」とは、学習者が高い自己効力感をもって学習に取り組んでいるかどうかといったことを指している。「行動」とは、学習を最適なものにする物理的・社会的環境を自ら選択・構成・創造していることを指している。そして、学習者がメタ認知、動機づけ、行動の三つの側面において、自己調整の機能を働かせながら学習を進めていく在り方のことを「自己調整学習」と定義している。

2.1.2. 自己調整学習方略とは

自己調整学習を支える重要な要素の一つに「自己調整学習方略」がある。「自己調整学習方略」とは、学習を効果的に進めるために個人内の認知過程、学習行動、学習環境といった側面を自己調整する方略のことである。自己調整学習方略は「認知的方略」、「メタ認知的方略」、「リソース管理方略」の三つに分けられ、それぞれの方略について更に具体的な方略に分けられている。それぞれの方略について、伊藤がピントリッヒの研究をまとめたものに、市川（1993）の研究の知見を加えたものを、表2に自己調整学習方略のリストとしてまとめる。例えば、「メタ認知的方略」の「プランニング」により適切な目標を設定し、着実にその実現へと至る計画を立案する。そして、「モニタリング」によって活動の遂行状況を点検する。問題が発生した場合にも、立ち止まってどうすべきか考え、学習の方法や問題解決の方略、目標を適切に修正するという「調整」を行う。このようにし

表2 自己調整学習方略のリスト

上位カテゴリー	下位カテゴリー	方略の内容
認 知 的 方 略 (学習内容に注意を向け、その覚え方などを工夫する方略)	リ ハ ー サ ル	学習内容を何度も繰り返して覚えること
	精 緻 化	学習内容を言い換えたり、すでに知っていることと結びつけたりして学ぶこと（なぜこうした公式が得られるのか理解しながら覚えるなども含む）
	体 制 化	学習内容をグループにまとめたり、要約したりして学ぶこと
	批 判 的 思 考	根拠や別の考えを検討したり、批判的に吟味して新たな考えを得ようしたりとすること
メタ認知的方略 (自らの認知過程の遂行状態に注意を向け、必要に応じて調整を行う方略)	プ ラ ン ニ ン グ	課題を分析し、目標を自ら設定して、目標達成に向けた計画を立てること
	モ ニ タ リ ン グ	自分で設定した目標や計画が予定通りに進行しているかどうかを定期的に確かめながら、目標に向かって学習を進めていくこと
	調 整	必要に応じて自分で設定した計画や方略を修正したりしながら、目標達成に向かって学習を進めること
	教 訓 帰 納	ある問題を解いたことによって、何が分かったのかを教訓として引き出すこと
リソース管理方略 (自分が使うことのできる資源（リソース）を有効に活用していく方略)	時 間 管 理	学習のプランやスケジュールを立てて時間の管理をすること
	努 力 管 理 方 略	興味がわからない内容やむずかしい課題であっても取り組み続けようとする
	ピ ア ラ ー ニ ン グ	仲間とともに学んだり、話し合ったりして理解を深めること
	学 習 環 境 の 構 成	学習に取り組みやすくなるように環境を整えること
	他 者 へ の 援 助 要 請	学習内容が分からないときに、教師や仲間に援助を求めること

て学習者は、自分自身の学習過程に能動的に関与していき、学習を効果的に進めることができる。また、一人の人間が所有できるリソースには自ずと限界があるので、「リソース管理方略」の「他者への援助要請」によって、必要に応じて他者に援助を要請できる能力や態度も効果的に学習を進める上では重要である。

2.1.3. 「学習を調整する視点」とは

自己調整学習理論によれば、学習者は自己調整学習方略を用いると、自己調整して学習を効果的に進めることができる。しかし、各教科等の授業においては、自己調整して学習を進めることのみが目的ではなく、各教科等の学習活動を通して資質・能力の育成を図る必要がある。したがって、自己調整学習方略をそのまま各教科等の授業に取り入れてしまうと、生徒に自己調整学習方略に取り組ませ、学習を調整させることに主眼を置いてしまうことになりかねない。そこで本校では、生徒が学習を調整しながら各教科等の学習活動に取り組み、各教科等の学習を効果的に進めることができるようにするため、自己調整学習方略の要素を網羅しつつ、表3のように「学習を調整する視点」と捉え直し、教師は「学習を調整する視点」をもって授業づくりを行うことにした。なお、各視点の名称は、教師間で視点の認識を共有しやすくするために、視点の特徴を端的に表すものになっている。そして、どの自己調整学習方略と対応しているものなのか分かるように括弧書きで補足してある。これ以降、本稿において、学習を調整する視点は、「コンテンツの視点」、「プロセスの視点」、「リソースの視点」と表記する。

2.2. 学習を調整する視点と三つの活動との関係

本校では1年次より、三つの活動を通して Society5.0 で求められる資質・能力を育成してきた。本研究では、教師が学習を調整する視点をもって授業づくりを行い、生徒が自らの学習を調整しようとしながら学習活動に取り組むことができるように手立てを講じれば、三つの活動が更に充実して「主体的に学習に取り組む態度」が高まり、資質・能力の三つの柱をバランスよく育成することができると考えた。なお、各教科等において、学習を調整する視点を取り入れて三つの活動を工夫するときに、三つの活動のどの活動についても学習を調整する視点で工夫することは可能であると

表3 本校で捉えた学習を調整する視点

視点	内容	例
コンテンツの視点 (認知的な視点)	学習内容そのものに注意を向けさせる視点	繰り返し読み書きしたり、自主的に質問や調査をしたりして獲得した知識や自分の考えを、既習事項と結びつけて整理・要約したり、確かめたりして、より深い理解やよりよい考えにつなげられるようにすること
プロセスの視点 (メタ認知的な視点)	学習の活動状況や理解状況に注意を向けさせる視点	目的や目標をもって、解決方法の計画を立て、必要に応じて確認・修正しながら学習を進め、自己の学習を省みて、学んだことを次に生かしつなげられるようにすること
リソースの視点 (リソース管理の視点)	自分が使うことのできる資源(リソース)を有効に活用させる視点	必要に応じて他者へ援助を求めるなどして、どのような課題にも努力し続け、他者と関わりながら学びを深められるように、学習の計画や環境を整え管理できるようにすること

本校は考えている。しかし、本校で試行錯誤している中で、三つの活動の種類や特性などによって、学習を調整する視点との関連付けやすさの違いを感じた。さらに、一つの活動に対して複数の視点が働くことも起こりうると考えている。そこで、本研究においては、各教科で活動の種類や特性などに応じて効果的な視点を選び、それぞれの活動を工夫していくことにした。そして、教師が活動の目的を明確にもち、学習内容そのものに注意を向けさせるのであれば「コンテンツの視点」を、学習の遂行状況に注意を向けさせるのであれば「プロセスの視点」を、自分が使うことのできる資源（リソース）を有効に活用させるのであれば「リソースの視点」をもたせるというように、活動の目的によって視点を使い分けていくことにした。

3. 学習を調整する視点を活用した「主体的に学習に取り組む態度」の評価の工夫

3.1. 単元等を通した評価の工夫

主体的に学習に取り組めるよう学習の見通しを立てたり学習したことを振り返ったりして、自分の学びや変容を自覚できる場面をどこに設定するかという点からの授業改善は、一単位時間の授業ごとに検討されるものではなく、単元や題材などの一定程度のまとまりごとに検討されるべきものである。したがって、内容のまとまりごとの評価規準を作成した上で、それを踏まえて単元や題材の指導と評価の計画を作成することが重要である。さらに、一つ一つの単元や題材の計画を充実させて時数が多くなっただけに、年間の授業時数とのバランスを欠いてしまうことも考えられる。そのために、年間指導計画を作成する必要がある。その年間指導計画には三つの機能を備えさせている。一つ目は、各教科等の年間学習内容をまとめた単元配列表を作成することで、各教科等の学習内容を相互の関係で捉え、学校や学年、各教科等の目標を踏まえた教科横断的な視点でそれらの目標の達成に必要な内容を組織的に配列できるという機能である。二つ目は、各教科等の一年間で身に付けさせる資質・能力を明確に示すことで、身に付けさせる資質・能力を意識して単元や題材の指導計画を作成できるという機能である。三つ目は、単元や題材および各時間の目標と評価規準を示すことで、単元や題材を見通して指導と評価を一体的に計画できるという機能である。

3.2. 多様な評価方法の活用

中教審報告において、『主体的に学習に取り組む態度』の具体的な評価の方法としては、ノートやレポート等における記述、授業中の発言、教師による行動観察や、児童生徒による自己評価や相互評価等の状況を教師が評価を行う際に考慮する材料の一つとして用いることなどが考えられる。」と示されている。しかし、本研究では三つの活動を通して「主体的に学習に取り組む態度」を評価するので、それぞれの活動の特質に応じた評価方法によって適切に評価する必要がある。そこで、森本（2017）が提唱する評価方法を基にして、次頁の表4に示す多様な評価方法の中から、各教科等で行う活動に適した評価方法で「主体的に学習に取り組む態度」を評価する。

3.3. 学習を調整する視点を活用した評価の工夫

本研究では、生徒が自らの学習を調整しようとしながら学習活動に取り組むことができるように、教師が学習を調整する視点をもって授業づくりを行って「主体的に学習に取り組む態度」を高める

表4 「主体的に学習に取り組む態度」の評価方法

評価方法	評価方法の内容
ノート・ワークシート法	気付きや思考が外化されたノートやワークシートの記述から学習状況を把握し、学習を支援していく方法
質問紙法	質問（アンケート等）の回答から学習状況を把握し、学習を支援していく方法
作品法	学習成果としての作品から学習状況を把握し、学習を支援していく方法
実技法	実技の記録などから学習状況を把握し、学習を支援していく方法
プレゼンテーション法	プレゼンテーションの記録から学習状況を把握し、学習を支援していく方法
面談法	教員と生徒（必要に応じて保護者や第三者を加える）との面談から学習状況を把握し、学習を支援していく方法
ポートフォリオ法	生徒の特徴的な学びをまとめたポートフォリオを用いて学習状況を把握し、学習を支援していく方法
テスト法	テストを受け、テストの解答と解き直しから学習状況を把握し、学習を支援していく方法
課題解決・探究法	課題解決や探究の遂行過程の記録から学習状況を把握し、学習を支援していく方法
テキストマイニング法	ソフトウェアを用いて生徒の記述中の単語の使用頻度や傾向、相関関係などを分析して学習状況を把握し、学習を支援していく方法

表5 「主体的に学習に取り組む態度」を評価する理科授業の事例の概要

単元	第3学年第2分野「天体の動きと地球の自転・公転」
学習活動	天体の相対的な動きによる見え方と地球の自転とを関連付けて、モデルを用いて地球の自転の向きを推論する。
評価規準	太陽や星の日周運動について、モデルを用いて試行錯誤しながら、地球の自転の向きを推論しようとしている。
評価方法	授業の終末において、自転の向きを考察する過程で、どのように解決しようとしたか、学習前後の考えを比較して振り返りシートに生徒が書いた内容から評価する。

という指導の工夫を行う。したがって、学習を調整する視点で工夫した授業に取り組む生徒の「主体的に学習に取り組む態度」は、学習を調整する視点を活用して評価をすれば、指導と評価の一体化が図れるのではないかと考えた。具体例を、国立教育政策研究所（2020）の参考資料中学校理科に掲載されている「主体的に学習に取り組む態度」の評価の進め方の事例を用いて示す。事例の概要は表5のとおりである。また、生徒の振り返りシートの記述例として、参考資料では次頁の表6の記述が示されている。

表6の下線部の記述から、この生徒はモデル実験の結果から考えたことが、日常生活の経験と結びついて理解が深まった様子がうかがえる。これは、「コンテンツの視点」における「獲得した知識や自分の考えを、既習事項と結びつけて確かめ、より深い理解につなげられるようにすること」と関連が深いと判断した。そして、乗り物に乗ったときの経験と同じであると具体的に記述していて、

表6 参考資料に示されている生徒の振り返りシートの記述例

モデル実験の結果を実際の太陽の動きと合わせて考えた。乗り物に乗って目の前の風景が近づいてくるように見えることと原因は同じことに気付いた。地球が自転する映像はよく見るが、自転の向きを方位で考えたことがなかったので、楽しんで取り組めた（下線は筆者による）。

考えの深まりがあったと見取ることができる。したがって、「太陽や星の日周運動について、モデルを用いて試行錯誤しながら、地球の自転の向きを推論しようとしている。」という評価規準に照らして、「主体的に学習に取り組む態度」は「十分満足できる」状況（A）と判断した。これに対して、生徒の記述の中に学習を調整する視点と関連が深いと判断できる部分があっても、具体的な内容の記述がなく、学習の状況が質的な高まりや深まりをもっていると見取ることができない場合、「おおむね満足できる」状況（B）と判断できる。

さらに、生徒の記述の中に学習を調整する視点と関連が見られず、学習活動の内容や理解した事項を書いているだけの場合、「努力を要する」状況（C）と判断できる。

このような見取り方は、「天体の動きと地球の自転・公転」の単元のみならず、他の単元においても適用することができ、更には他教科においても適用することができるものとする。したがって、本研究で捉えている学習を調整する視点は、「主体的に学習に取り組む態度」を指導する際に活用できるものであるとともに、それを評価する際にも活用できるものであり、指導と評価の一体化に有効であると考えられる。

4. 研究の成果と課題

本研究では、学習を調整する視点を取り入れて、Society5.0で求められる資質・能力を育成する三つの活動を工夫し、「主体的に学習に取り組む態度」の育成を図った。また、学習を調整する視点を活用して、その評価の工夫を行った。そのようにすることによって、学習するときに、既に知っていることと関連付けて考えたり、授業が終わるときに何が大切なのか振り返ったりする生徒が多く見られるようになった。また、これまで学習に粘り強く取り組んだり、学習を調整したりしようとしていなかった生徒の意識が高まっていると感じた。

今後は、生徒が学習を調整する視点を意図的・意識的に用いて学習に取り組もうとするようにしていくことで、主体的に学習に取り組む態度の更なる高まりが期待できる。また、本研究では各教科において指導と評価の工夫を行ったので、すべての教科・領域において視点を意図的・意識的に用いて学習に取り組もうとするとより一層効果的であると考えられる。

【付記】

本報告は、令和3年度鹿児島大学教育学部附属中学校研究公開で発表した内容に基づき、その研究成果をまとめたものである。

【主な引用・参考文献】

- 文部科学省 (2017) : 中学校学習指導要領 (平成 29 年告示) 解説 総則編, 東山書房
- 文部科学省 (2018) : Society5.0 に向けた人材育成～社会が変わる, 学びが変わる～, Society5.0 に向けた人材育成に関わる大臣懇談会 新たな時代を豊かに生きる力の育成に関する省内タスクフォース
- 国立教育政策研究所 (2020) : 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料, 東洋館出版社
- 櫻井茂男 (2020) : 学びの「エンゲージメント」, 図書文化社
- 塚野州一, 伊藤崇達ほか自己調整学習研究会編 (2012) : 「自己調整学習ー理論と実践の新たな展開へー」, 北大路書房
- 町岳 (2020) : 主体的に学び合いに取り組む集団づくり, 指導と評価 2020 年 6 月号, 図書文化社
- 市川伸一ほか (1993) : 学習を支える認知カウンセリングー心理学と教育の新たな接点ー, ブレーン出版
- 森本康彦 (2017) : 教育分野における e ポートフォリオ, ミネルヴァ書房
- 竹下洋一 (2020) : 新たな時代を豊かに生きる生徒の育成ーSociety5.0 で求められる資質・能力の育成を目指してー, 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 第 29 巻, 308-317 頁
- 鹿大附属中 (2019-2021) : 新たな時代を豊かに生きる生徒の育成